

高校での学習に関する大学生への回顧質問紙調査

——総合的な学習・授業形態・自主活動・高校での学びに関して——

A retrospective questionnaire survey about high school learning and experiences —— Comprehensive learning, Form of teaching, Voluntary activities, Learning in high school——

高橋 亜希子

Akiko TAKAHASHI

要 旨

2018年3月に告示された次期高校学習指導要領においては多くの“探究”と名の付く科目が導入される。しかし、高校での「総合的な学習の時間」は低調といわれる。そこで、高校における(1)「総合的な学習の時間」の状況、(2)教科学習の授業の状況、(3)自主活動の状況、(4)高校時代を通して学んだこと、に関して、5つの大学の計374名の大学生に対する回顧的な質問紙調査から検討した。調査は2016年6月～7月に実施した。その結果以下の点が明らかになった。①高校の「総合的な学習の時間」の実施・内容は低調である、②教科学習は一斉授業が中心である一方で、生徒は生徒主体・参加型の授業を望んでいる、④大学進学への知識・学力の獲得、仲間関係の形成、集団での協力経験が、高校で学んだことの上位に挙がる。⑤高校で学んだことは「関係性・体験の広がり」「生き方・自信・行動スキル・能動性」の3因子に分かれ、授業外の自主活動との関連が見られた。総合的な学習の時間への肯定的な印象は、「関係性・体験の広がり」との関連が見られた。

1 問題と目的

2018年3月に次期高校学習指導要領が告示された。「主体的・対話的・深い学びの充実」という授業方式の転換とともに、理数探究、日本史探究、世界史探究、「総合的な探究の時間」等の「探究科目の導入」が示された。また2020年度からの大学入学共通テストにおける記述式問題の導入、国立大学における探究活動を用いた推薦入試の拡大など、高校教育が大きな転換点を迎えている。

「総合的な学習の時間」は、「総合的な探究の時間」に変わり、2019年度の試行期間から実施される。「自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力

を次のとおり育成する」という目標は変わらないながらも、目標の中に「(2) 実社会や実生活と自己との関わりから問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。」と明記され、問いを立て、情報収集をし、解決するという探究学習として行うことが強調されている。その背景には、高校での「総合的な学習の時間」が2004年に導入後一貫して低調であり、大学訪問や適性検査などの進路学習などへの振替が指摘される状況(中村, 2015)があると考えられる。しかし、文部科学省の各高校を対象とした教育課程実施調査(文部科学省, 2014)においては、高校普通科における、「総合的な学習の時間」の実施状況は「全学年で実施」が83.0%、総合学科は「全学年で実施」が18.5%、「2.3年で実施」が74.7%であり、実施していないという回答はない。実際の実施状況や内容を知るためには、授業を受けた生徒に調査する必要があるだろう。

また、「主体的・対話的・深い学びの充実」などの次期指導要領の方向性は、高校での授業実態や生徒の要望と一致しているのだろうか。そして、部活動の在り方も問われ、行事も削減される中で、授業外の探究活動や自主活動は現在どのような状況であり、高校は生徒にとってどのような教育機関として存在しているのだろうか。

本調査では、高校教育を経験した大学生を対象にした回顧的な質問紙調査から、高校での学習の状況を検討する。具体的には、大学生に対する質問紙調査を通して、高校における(1)「総合的な学習の時間」の状況、(2)教科学習の授業の状況、(3)自主活動の状況、(4)高校時代を通して学んだこと、に関する検討を行い、探究学習導入へ向けた状況、教科学習の状況、教育機関としての高校の在り方について考察を行う。

2 質問紙調査の概要

1) 質問紙の内容と構成

質問紙の構成は、「0 現在の学部・学科・学年」「1 高校名, 学校種, クラス数」「2 高校における総合的な学習の時間の内容, 実施状況, 印象, 学んだこと」「3 高校時代の教科の授業の形式, 印象に残った授業, 授業への要望」「4 授業外での探究的な活動, 研究, プロジェクトなどを実施した経験・授業外での自主的な活動経験」「5 高校で学んだこと」である。多肢選択式の項目と自由記述から成る。具体的な項目の内容は、結果の項で示す。

2) 調査協力者

調査協力者は374名の大学生である。調査は2016年6月～7月に実施し、5つの大学の講義時に質問紙を配布、回答を得た。調査協力者の所属大学の概要・人数は表1の通りである。文科系が中心で、偏差値は49～68の範囲となっている。またA大学は北海道、B～E大学は関東地方に位置している。調査協力者の実施時の在籍学年は表2に示した通りであり、当時の大学2年生が主な対象となっている。

調査協力者の男女比は男性が225名、女性が124名(記載なし25名)と男女が約2:1であった。出身高校の割合は、公立高校が258名、私立高校が82名(記載なし34名)と公立:私立が約3:1であった。

表1 調査協力者の所属大学の概要・協力者の人数

大学名	協力者数	偏差値 ¹	学部・学科	国立・私立	場所
A大学	186名	50～57	教員養成	国公立文系	北海道
B大学	109名	62～68	文系の多様な学科	私立文系	関東
C大学	14名	66～70	文系の多様な学科	私立文系	関東
D大学	18名	57～69	文系の多様な学科	国公立文系	関東
E大学	47名	49～52	教育学科	私立文系	関東

¹偏差値は2017年の“ベネッセ マナビジョン”による。

表2 調査実施時の調査協力者の在籍学年

	A大学	B大学	C大学	D大学	E大学	計
1年	14	0	0	0	0	14
2年	171	61	14	5	0	251
3年	1	33	0	13	1	48
4年	0	14	0	0	46	60
記載なし	0	1	0	0	0	1
計	186	109	14	18	47	374

3 高校での「総合的な学習の時間」について

はじめに、質問紙の項目の2にあたる、高校における「総合的な学習の時間」の内容、実施状況、印象、学んだことに関する項目の回答を分析する。北海道と関東という地域性の違い、また、各大学の偏差値等の違いもあるため、大学ごとの回答の割合と合計の割合を示す形の表としている。

1) 「総合的な学習の時間」の実施状況

表3 「『総合的な学習の時間』は週の時間割に入っていましたか」についての回答

	A大学	B大学	C大学	D大学	E大学	計 (%)
ア 入っていた	43.1	55.8	50.0	44.4	27.7	43.0
イ 行事などでまとめて入っていた	19.0	9.6	14.3	0.0	31.9	16.0
ウ アとイの両方	12.1	10.6	0.0	0.0	4.3	9.1
エ 他の授業に振り替えられていた	5.7	11.5	14.3	22.2	12.8	9.1
オ 時間割に入っていなかった	20.1	12.5	0.0	22.2	17.0	16.0
記載なし	6.9	4.8	21.4	11.1	6.4	6.7

低調といわれる「総合的な学習の時間」であるが、生徒の経験した実施状況はどうであろうか。表3は、「『総合的な学習の時間』は週の時間割に入っていましたか」への回答である。2013年に実施された文部科学省の教育課程実施調査（文部科学省，2014）は、本調査対象の学生が高校生であった時期に実施されたものであるが、先ほど挙げたように普通科は「全学年で実施」が83.0%，

総合学科は「全学年で実施」が18.5%、「2.3年で実施」が74.7%であり、実施していないという回答はない。それは、一方、本調査は、生徒の記憶によるため不正確はあると思われるが「他の時間に振り替えられていた」が9.1%、「時間割に入っていなかった」が16.0%で約4分の1の生徒が「総合的な学習の時間」がなかったと回答している。

高校学習指導要領では、「総合的な学習の時間」は高校3年間で105時限（70時限にまで減ずることが可能）の形で実施が義務付けられている。そのため、教育課程実施調査では、実施していないという返答はなかったのだと考えられる。しかし、今回の調査からは、「行事などでまとめて入っていた」（16.0%）「他の授業に振り替えられていた」（9.1%）のように、文化祭、体育祭、修学旅行などの行事の時間に用いられたり、教科の授業に振り替えられていたり、「時間割に入っていなかった」（16.0%）というように、存在すらないという状況になっていたことが読み取れる。

2) 高校での「総合的な学習の時間」の印象

表4 「高校での『総合的な学習の時間』の印象について」の回答

	A大学	B大学	C大学	D大学	E大学	計 (%)
ア とても印象に残っている	4.3	3.7	0.0	0.0	2.1	3.5
イ まあまあ印象に残っている	19.4	12.8	7.1	16.7	10.6	15.8
ウ あまり印象に残っていない	37.6	34.9	57.1	38.9	29.8	36.6
エ まったく印象に残っていない	30.6	43.1	21.4	44.4	53.2	37.4
記載なし	8.1	5.5	14.3	0.0	4.3	6.7

表4は「高校での『総合的な学習の時間』の印象について」に対する回答の集計である。「とても印象に残っている」が3.5%である一方、「あまり印象に残っていない」36.7%「全く印象に残っていない」が37.5%と全体の7割強となっており、高校での「総合的な学習の時間」の大学生への印象は希薄なものとなっている。

3) 高校での「総合的な学習の時間」の内容

表5 「『総合的な学習の時間』で行った内容を教えてください」の回答（複数回答可）

	A大学	B大学	C大学	D大学	E大学	計 (%)
ア 外部講師による講演・技術指導など	52.7	38.5	35.7	11.1	34.0	43.6
イ 映画などの鑑賞	8.6	23.9	21.4	11.1	12.8	14.2
ウ 大学訪問	15.1	19.3	7.1	11.1	27.7	17.4
エ 学外見学・学外実習など（ウ以外）	8.6	10.1	7.1	5.6	17.0	9.9
オ 進路学習（適性検査・面接練習など）	55.9	63.3	64.3	66.7	40.4	57.0
カ 職場体験・インターンシップ	12.9	3.7	0.0	16.7	10.6	9.6
キ 修学旅行の事前学習・事後学習	52.7	67.0	71.4	44.4	53.2	57.2
ク その他	9.7	7.3	4.3	16.7	10.6	9.6

ク その他の内容

覚えていない (8), 授業なし, 特にしっかりしたことはしてなかった
 話をメモする, 授業, 講演を聞いて終わり, 講演会, 修学旅行の中で京都大学の見学をした,
 教員側からの指導 (パワーポを用いて), 先生が説明していた。
 お祭りへの練習や講演会, 校外活動, ジグゾー法,
 学園集会, 学級活動, 学祭の準備, 学級レク, 学校祭の準備
 哲学の授業, キリスト教について, 教養, 読書会, 論文作成, 学年関係なくアンサンブル研究

表5は「『総合的な学習の時間』で行った内容を教えてください」への回答である。「修学旅行の事前学習・事後学習」(57.2%)が1位「進路学習(適性検査・進路学習など)」(57.0%)が2位、「外部講師による講演・技術指導など」(43.6%)が3位であり、修学旅行の事前事後指導、進路学習などが中心である。2013年実施の文部科学省の教育課程実施調査でも「キャリア」に関する学習が8割との回答であり、進路学習の時間となるケースが多い。「ク その他」の回答の内容も、講演を聴いたり、授業に振り替えられていたり、特別活動の時間にあてられたりしているものが多いが、哲学や宗教の授業、論文作成などを行っている例もみられる。

4) 高校での「総合的な学習の時間」で用いられた学習方法

表6 「『総合的な学習の時間』での学習方法」への回答(複数回答可)

	A大学	B大学	C大学	D大学	E大学	計
ア 書籍・資料を読む	43.5	44.0	57.1	33.3	29.8	42.0
イ NIE(新聞活用学習)	5.9	5.5	7.1	11.1	0.0	5.3
ウ インターネットの検索	33.9	40.4	21.4	16.7	27.7	33.7
エ フィールドワーク	8.6	11.0	0.0	0.0	8.5	8.6
オ インタビュー	16.7	12.8	7.1	5.6	10.6	13.9
カ アンケート・調査の実施	3.8	7.3	0.0	0.0	2.1	4.3
キ デイバート	8.1	15.6	14.3	11.1	12.8	11.2
ク ディスカッション	18.8	21.1	35.7	5.6	12.8	18.7
ケ KJ法	2.7	1.8	7.1	0.0	4.3	2.7
コ マインドマップ	3.2	3.7	21.4	0.0	0.0	3.5
サ プレゼンテーションソフト(パワーポイント・Prejiなど)	16.1	10.1	7.1	0.0	6.4	12.0
シ 発表会	18.8	11.9	7.1	5.6	4.3	13.9
ス 小論文・レポートの作成	23.7	20.2	7.1	5.6	4.3	18.7
セ その他	9.1	7.3	0.0	11.1	6.4	8.0

表6は「『総合的な学習の時間』で学習方法として行われていたこと」への回答である。回答率が高い項目から「書籍・資料を読む」(42.0%)「インターネットの検索」(33.7%)であり、資料の検索、読解が中心である。「ディスカッション」(18.7%)「ディベート」(11.2%)などの生徒同士の対話、「インタビュー」(13.9%)「フィールドワーク」(8.6%)などがそれに続いているが、実施率は1割から2割に留まっている。

5) 「総合的な学習の時間」を通して学んだこと

表7 「『総合的な学習の時間』を通して何を学びましたか？」への回答（複数回答可）

	A大学	B大学	C大学	D大学	E大学	計(%)
ア 学習を通して新たな人、場所、本に出会う体験ができた	23.7	22.9	35.7	0.0	12.8	21.4
イ ものづくり、栽培、校外活動など、新たな活動をする体験を得た	9.1	12.8	14.3	0.0	6.4	9.6
ウ 学校外の社会や友達のことを知る機会になった	15.6	19.3	7.1	5.6	14.9	15.8
エ 一つの題材について深く知り、考えていく機会となった	26.3	25.7	35.7	5.6	19.1	24.6
オ 作業を通じ、新たな知識や技術を得ることができた	21.5	19.3	14.3	0.0	14.9	18.7
カ 調査の方法を学んだ	12.9	13.8	7.1	0.0	6.4	11.5
キ 文章の書き方を学んだ	21.0	15.6	14.3	0.0	2.1	15.8
ク 学習を通じて、今まで気づけなかった自分の性格や能力に気づいた	13.4	16.5	42.9	16.7	10.6	15.2
ケ 学習を通じて、自分の将来の進路がはっきりとした	31.7	33.0	42.9	22.2	14.9	29.9
コ 学習を大学の推薦入試に用いることができた	10.8	14.7	28.6	0.0	6.4	11.5
サ 以前より、人前で自分の意見を言ったり、話したりすることができるようになった。	3.8	5.5	7.1	5.6	4.3	4.5
シ その他	7.0	2.8	14.3	5.6	12.8	6.7

その他：なし (7), 覚えていない (3), 特に学んでいない, わからない, 授業なし
 進路調査ばかりで大学生活に活かされていない。卒業後にやっていたことが総合的な学習だったと知った程度で、印象がほぼない。必要性を感じないが、受験期の自習は役立った。
 SSHにて、深く物事を研究することを学んだので、大学での深い学習に活用できていると思う。
 知識が深まった。
 「自分なりの考え方」に固執するようになった。講演会とかは勉強になった。
 国語。芸術にふれた。
 グループディスカッションや人前で自分の意見を言う。
 1つのテーマに対してグループで話し合う
 グループワークの仕方と話し方；自分と他人の意見の折り合いの付け方等、
 隣のクラスとの人間関係、技術
 学祭準備を通して多くの人と何かをやり遂げることを学んだのでグループワークに生かしている
 自分とは何か等哲学や専門に特化した特殊な授業体験ができた、海外への興味を持った。

表7は「総合的な学習の時間」を通して何を学びましたか?」への回答である。最も回答率が高い項目は「学習を通じて、自分の将来の進路がはっきりとした」(29.9%)である。これは総合的な学習の時間の内容が進路学習が中心であるためと思われる。その次は「一つの題材について深く知り、考えていく機会となった」(24.6%)「学習を通して新たな人、場所、本に出会う体験ができた」(21.4%)「作業を通じ、新たな知識や技術を得ることができた」(18.7%)となっており、新たな題材、人、場所、本と出会い、技術を学び深く考える機会となっていることがうかがえる。

「その他」の項目の回答をみると、「覚えていない」「進路調査ばかりで大学生活に生かされていない」「受験期の自習は役だった」など、形式的な実施になっていたという記述の一方で「SSHにて、深く物事を研究することを学んだので、大学での深い学習に活用できていると思う」「グループワークの仕方と話し方；自分と他人の意見の折り合いの付け方等」「自分とは何か等哲学専門に特化した特殊な授業体験ができた」など、研究や深い思考の機会、グループワークの機会、専門的な学習などの機会になったという記述もみられる。

中村(2015)などの先行研究の指摘の通り、高校の「総合的な学習の時間」の実施の状況は低調であり、学習内容・方法も、修学旅行の事前事後指導や進路学習や、書籍を読む、インターネット検索など、生徒が「自ら課題を設定し、追究する」活動からは遠い。しかし、学習が、新たな題材、人、場所、本と出会い、技術を学び深く考える機会となった生徒も存在しており、実施された場合の生徒への意義も読み取れる結果となっている。

3 高校での教科学習の授業の方法・内容・課題に関して

次に、高校での通常の教科学習の授業の授業形式・方法・課題に関する質問紙の項目を検討する。

1) 教科の授業形式・方法に関して

表8 「高校での教科の授業の授業形式はどのようでしたか」への回答

	非常に多い ←	→ 全くない	平均値
ア 先生の説明を中心とした一斉授業	7 - (6) - 5 - 4 - 3 - 2 - 1		6.06
イ 日常生活の出来事や例を取り上げて題材としたり説明したりする授業	7 - 6 - 5 - 4 - (3) - 2 - 1		3.45
ウ ペア学習	7 - 6 - 5 - 4 - (3) - 2 - 1		3.53
エ 3~6名のグループ学習	7 - 6 - 5 - 4 - (3) - 2 - 1		3.07
オ ディスカッション	7 - 6 - 5 - 4 - 3 - (2) - 1		2.52
カ ディベート	7 - 6 - 5 - 4 - 3 - (2) - 1		2.19
キ インターネットを用いた情報検索	7 - 6 - 5 - 4 - 3 - (2) - 1		2.83
ク レポートや小論文を書く	7 - 6 - 5 - 4 - 3 - (2) - 1		2.71
ケ テーマを決め研究や調べ学習を行う	7 - 6 - 5 - 4 - 3 - (2) - 1		2.67
コ プレゼンテーション・発表	7 - 6 - 5 - 4 - 3 - (2) - 1		2.65
サ 制作や実習	7 - 6 - 5 - 4 - 3 - (2) - 1		2.88
シ 実験	7 - 6 - 5 - 4 - (3) - 2 - 1		3.39
ス 校外学習	7 - 6 - 5 - 4 - (3) - 2 - 1		3.39

表8は「高校での教科の授業の授業形式はどのようでしたか」を非常に多い（7点）から全くない（1点）までの7件法で訊ねた回答の平均値である。5つの大学別のグラフとすると煩雑となるため、全体の平均値を示した。

「先生の説明を中心とした一斉授業」（6.06）が割合としては最も多い。続いて「ペア学習」（3.53）、「3～6名のグループ学習」（3.07）などの協同学習、「実験」（3.39）と続く。「テーマを決め研究や調べ学習を行う」は2.67、「レポートや小論文を書く」も2.71と同様と低い割合であった。高校の教科学習においては、教師の説明を中心とした一斉授業が中心であり、協同学習や探究活動、調査・実験は多くはない状況である。

2) 高校の教科の授業への要望

表9 「高校の授業で改善してほしい点・もっとこのような授業があるとよいと思う点を教えてください」への回答の分類

	カテゴリー	回答内容の例	回答数
高校の授業への不満	説明・講義が多い、一斉授業、つまらない、一方的	・先生がずっと話している授業が多くて、眠たかったです。 ・先生の説明が一方的だった ・教師の都合・ペースで一方的に授業する形式をやめてほしい	60
	受験のための知識詰め込みだけでない授業に	・受験の点数アップのための授業が多いような気がするので、受験のテクニックだけではなく、本質を教えてほしい ・受験のための詰め込みで正直つまらなかった	15
高校の授業形式への要望	生徒が参加したり話し合ったりできる授業を	・積極的に生徒が発言・受け答えのできる授業 ・教師が話すだけでなく生徒が参加できる授業を ・生徒が主体となる授業	45
	ディベート・ディスカッション・調査・フィールドワークなどを行ってほしい	・校外学習があればいいと思った。発表やプレゼン・ディベートの大切さ。 ・レポートや発表等、自分たちで考え、作るようなものがなかったので、そういうのをやってもよかったと思う。	22
	実験を増やしてほしい	・理科の実験を増やすべき	7
	グループワークを取り入れてほしい	・講義形式だけではなく、クラスの子と話し合う時間がほしかった。 ・もう少しグループワークを増やすべきである。	7
高校の授業の在り方への要望	考えさせる授業・考える時間を増やしてほしい	・教科の奥深さを伝え、生徒に考えさせる授業がもっとあってよい ・考えさせる授業の展開、常識をくつがえすことができる授業	13
	面白い授業・興味の持てる授業	・その教科を好きになれる授業をしてほしい ・内容が面白い、または先生が面白い授業	10
	現実・社会・人生との接点のある授業	・もっと現代社会の仕組みを考えさせるような授業があるとよい ・家族以外の人たちとふれあう機会があるとより社会のことがわかると思います ・生きていくために必要であろうことを教えてくれる授業	9
	わかりやすい授業	・生徒がわかりやすい授業がほしい。なんでわからないの？じゃなくてもっと教え方を工夫してほしい。	8
	実生活に役立つ授業・技術	・英語が話せるようになる授業 ・情報Cの授業のような実生活に役立つような授業をもっと増やして欲しかった	4
大学受験対策	大学受験の対策を行ってほしい	・大学入試に使える知識や、速く解ける方法をもっと教えてほしかった。 ・受験を意識した授業がほしかった	14
その他		・教科書に載ってないことも教えてほしい ・将来の夢につながるような選択授業があると良いと思う。	31

表9は、「高校の授業で改善してほしい点・もっとこのような授業があるとよいと思う点を教えてください」への自由記述の回答の分類である。空欄の回答もあったため、回答率ではなく、分類のカテゴリーと回答内容の例と回答数を示した。

高校の授業への不満としては「説明・講義が多い、一斉授業、つまらない、一方的」が60件と最も多く「先生がずっと話している授業が多い」「先生の説明が一方的だった」という記述があった。「受験のための知識詰め込みだけでない授業に」という要望も15件あり、教師中心の一斉授業や一方的、受動的な授業への不満、受験対策としての詰め込み授業に対する批判が挙がっている。

高校の授業形式への要望としては、「生徒が参加したり話し合ったりできる授業を」が45件挙げられている。「ディベート・ディスカッション・調査・フィールドワークなどを行ってほしい」(22件)「実験を増やしてほしい」(7件)「グループワークを取り入れてほしい」(7件)など、生徒の授業参加や生徒同士の対話や実験、調査などがある授業形式への要望が挙げられている。

高校の授業の在り方への要望としては、「面白い授業・興味を持てる授業」(10件)「わかりやすい授業」(8件)のほかに、「考えさせる授業・考える時間を増やしてほしい」(13件)「現実・社会・人生との接点のある授業」(9件)「実生活に役立つ授業・技術」(4件)など、知識だけではなく、思考したり物事の本質に触れたりする授業、また社会や現実との接点がある授業や実生活に役立つ技術などへの要望が挙げられている。

全体的に、教師中心に行われる知識重視の一斉授業への不満が語られ、そのような授業形式への批判として、生徒の授業参加、能動的な学習形式、物事の本質に触れる学習などが、生徒から要望されている。

4 高校での授業外での探究活動・自主活動

高校における「総合的な学習の時間」での探究的な学習は活発ではなく、教科学習においても一斉授業が中心であるという結果となった。それでは、授業外の特別活動や部活動、生徒会活動における探究的な活動や自主活動の状況はどうだろうか。高校での授業外での探究活動・自主活動に関する項目を分析する。

1) 授業以外での探究的な活動、研究、プロジェクトなどの実施経験

表10 「授業以外の活動やスーパーサイエンスハイスクールの活動などで、探究的な活動、研究、プロジェクトなどを実施した経験はありますか？」への回答

	A大学	B大学	C大学	D大学	E大学	計 (%)
ア 生徒会活動	4.6	7.3	14.3	0.0	6.4	5.6
イ 部活動	33.9	33.0	50.0	22.2	34.0	32.6
ウ 委員会活動	14.4	14.7	57.1	11.1	10.6	15.0
エ 修学旅行・宿泊研修	33.3	42.2	71.4	22.2	21.3	34.2
オ 文化祭・体育祭	31.6	31.2	57.1	16.7	27.7	30.2
カ 地域活動	10.3	7.3	28.6	5.6	8.5	9.4
キ その他	9.2	1.8	7.1	0.0	0.0	5.1

その他	SSHで数学関係のものを研究した。また、発表もした。 SSHの一環で環境について研究発表した SSH, 錯視における実験。タンポポの成長についての実験をまとめ、発表した。 SSHにおける理数科の調査(それぞれのテーマ)をし、発表 SSH 3年通してのステージ発表 SSH 医療倫理や大地震について研究しパワーポイントを作成して発表した 研究・サイエンスキャンプ(ハワイで1週間科学について学んだ) サイエンスインストラクター・近くの大学に行って、最近の実験を行う。 英語で研究を発表 医学科希望の生徒で臓器提供についてディスカッションした 各班テーマを決め調べる 寮生活での活動 外国船通訳
-----	---

表10は、「授業以外の活動やスーパーサイエンスハイスクールの活動などで、探究的な活動、研究、プロジェクトなどを実施した経験はありますか？」への回答である。「修学旅行・宿泊研修」(34.2%)「部活動」(32.6%)「文化祭・体育祭」(30.2%)などの活動において約3割の生徒がなんらかの探究活動を行っている。「その他」の回答は5.1%であり、その活動の内容は、スーパーサイエンスハイスクール(SSH)における実験、調査、高大連携、ディスカッション、研究発表となっている。

2) 授業以外での、生徒が中心となった自主活動の経験

表11「授業以外の活動で、生徒が中心となって活動・運営したり、規則・予算を決めたり、企画を実施したりした経験はありますか？」への回答

	A大学	B大学	C大学	D大学	E大学	計(%)
ア 生徒会活動	19.0	22.9	7.1	33.3	17.0	19.5
イ 部活動	37.4	39.4	21.4	44.4	27.7	35.3
ウ 委員会活動	14.9	22.0	21.4	11.1	10.6	16.0
エ 修学旅行・宿泊研修	32.8	25.7	28.6	27.8	19.1	27.5
オ 文化祭・体育祭	60.3	46.8	42.9	66.7	42.6	51.9
カ 地域活動	4.0	8.3	0.0	0.0	4.3	4.8
キ その他	1.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8

その他	バンドのギタリストが3年の学校祭でテーマソングを作ったこと 高校での活動は基本的に生徒中心でした 学校祭は自分たちですべて作った 打ち上げの企画と運営
-----	--

表11は「授業以外の活動で、生徒が中心となって活動・運営したり、規則・予算を決めたり、企画を実施したりした経験はありますか？」への回答である。「文化祭・体育祭」が51.9%と半数以上の生徒が経験しており、「その他」の内容の自由記述も、テーマソングの作成、打ち上げの実施など学校祭での生徒の活動が記されている。「部活動」(35.3%)「修学旅行・宿泊研修」(27.5%)

においても、生徒の自主活動が3割程度行われている。

5 高校時代を通して学んだこと・得たこと

高校における「総合的な学習の時間」の状況、教科学習の状況、授業外での探究活動・自主活動の状況を検討した。それでは、それらの高校での学習や経験を通して、生徒は何を学んでいるのだろうか。高校時代を通して学んだこと・得たことに関する項目を分析する。

表12 「高校時代を通して学んだこと・得たことについて○を付けてください」への回答（複数回答可）

	A大学	B大学	C大学	D大学	E大学	計(%)
ア 大学受験、進学に役立つ知識、学力を得た	76.4	58.7	50.0	72.2	25.5	61.2
イ 教科学習の内容を理解できた	55.2	45.0	64.3	55.6	23.4	46.8
ウ 学問への関心を持つようになった	39.1	31.2	42.9	11.1	27.7	32.9
エ 調査・実験などの方法を学んだ	14.9	10.1	21.4	0.0	10.6	12.0
オ 文章の書き方を学んだ	46.6	32.1	35.7	27.8	19.1	36.1
カ 英語や文書作成、表計算など必要な技術が身に着けられた	31.6	26.6	35.7	33.3	10.6	26.7
キ 職業に役立つ知識、技術が身についた（カ以外）	13.8	8.3	7.1	5.6	12.8	11.0
ク 実生活に役立つ知識、技術が身についた	18.4	20.2	28.6	11.1	10.6	17.4
ケ 自分とは何か、人生は何かなどについて考える機会を得た	31.0	31.2	14.3	27.8	21.3	28.1
コ 社会や自分の周りの状況を理解する力を得た	36.2	36.7	21.4	11.1	21.3	31.6
サ それまでよりも交友関係が広がった	54.0	53.2	28.6	66.7	34.0	49.2
シ 新たな場所に出掛けたり、新たな体験をしたりする機会を得た	33.9	26.6	28.6	22.2	19.1	28.1
ス 将来の夢・生き方が見えた。	42.0	41.3	28.6	0.0	48.9	38.8
セ 自分に自信がついた	15.5	18.3	14.3	11.1	14.9	15.5
ソ 人を信頼できるようになった	17.2	25.7	14.3	22.2	31.9	21.1
タ 悩みを話せたり、助け合えたりする友人が得られた	50.6	52.3	57.1	44.4	53.2	49.7
チ 自分自身で計画して行動できるようになった	33.9	30.3	42.9	16.7	25.5	30.2
ツ 関心のあることを試し挑戦する経験を得た	27.0	27.5	28.6	5.6	23.4	24.9
テ 人前で自分の意見を言ったり、話したりすることができるようになった。	32.8	29.4	28.6	16.7	19.1	28.1
ト リーダーとして活動する経験を得た。	46.6	30.3	7.1	22.2	36.2	36.4
ナ みんなで協力して活動する経験を得た	56.9	53.2	50.0	72.2	55.3	54.3
ニ 意見や性格の異なる人と、協力したり折り合ったりして活動する経験を得た。	42.5	37.6	21.4	38.9	31.9	37.4
ヌ マナーや礼儀、ふるまい方が身についた	42.0	45.9	28.6	22.2	53.2	41.7
ネ 信頼できる教師に出会えた	42.5	51.4	35.7	38.9	29.8	41.7
ノ それまでより異性とスムーズに接することができるようになった	20.1	21.1	14.3	16.7	19.1	19.3

表 12 は「高校時代を通して学んだこと・得たことについて○を付けてください」の項目とその項目への回答である。各大学回答率が高い項目の上から4つまでを網掛けで示した。

大学間で共通して回答率の高い項目は「みんなで協力して活動する経験を得た」「それまでよりも交友関係が広がった」「悩みを話せたり、助け合えたりする友人が得られた」「大学受験、進学に役立つ知識、学力を得た」「教科学習の内容を理解できた」などであるが、E大学の回答は他の大学と少し傾向が異なり、「大学受験、進学に役立つ知識、学力を得た」「教科学習の内容を理解できた」への回答率が低く、代わりに「マナーや礼儀、ふるまい方が身についた」「将来の夢・生き方が見えた」の回答率が高くなっている。

表 13 高校時代を通して学んだこと・得たこと（全体：回答率の高い順）

	回答率(%)
ア 大学受験、進学に役立つ知識、学力を得た	61.2
ナ みんなで協力して活動する経験を得た	54.3
タ 悩みを話せたり、助け合えたりする友人が得られた	49.7
サ それまでよりも交友関係が広がった	49.2
イ 教科学習の内容を理解できた	46.8
ヌ マナーや礼儀、ふるまい方が身についた	41.7
ネ 信頼できる教師に出会えた	41.7
ス 将来の夢・生き方が見えた。	38.8
ニ 意見や性格の異なる人と、協力したり折り合ったりして活動する経験を得た。	37.4
ト リーダーとして活動する経験を得た。	36.4
オ 文章の書き方を学んだ	36.1
ウ 学問への関心を持つようになった	32.9
コ 社会や自分の周りの状況を理解する力を得た	31.6
チ 自分自身で計画して行動できるようになった	30.2
ケ 自分とは何か、人生は何かなどについて考える機会を得た	28.1
シ 新たな場所に出掛けたり、新たな体験をしたりする機会を得た	28.1
テ 人前で自分の意見を言ったり、話したりすることができるようになった。	28.1
カ 英語や文書作成、表計算など必要な技術が身につけられた	26.7
ツ 関心のあることを試し挑戦する経験を得た	24.9
ソ 人を信頼できるようになった	21.1
ノ それまでより異性とスムーズに接することができるようになった	19.3
ク 実生活に役立つ知識、技術が身についた	17.4
セ 自分に自信がついた	15.5
エ 調査・実験などの方法を学んだ	12.0
キ 職業に役立つ知識、技術が身についた（カ以外）	11.0

表 12 の項目を回答率の高い順に並べ替えたのが表 13 である。回答率の高い順に「大学受験、進学に役立つ知識、学力を得た」61.2%、「みんなで協力して活動する経験を得た」54.3%「悩みを話せたり、助け合えたりする友人が得られた」49.7%であり、大学進学への知識・学力の獲得、仲間

関係の形成、集団での協力経験が上位に挙がっている。

一方で、少ない順は「職業に役立つ知識、技術が身についた」(11.0%)「調査・実験などの方法を学んだ」(12.0%)「自分に自信がついた」(15.5%)「実生活に役立つ知識、技術が身についた」(17.4%)であり、職業・実生活につながるプラクティカルな知識・技術が下位となっている。

6 「高校時代を通して学んだこと・得たこと」の因子分析

表 14 「高校時代を通して学んだこと・得たこと」項目の因子分析結果

項目	因子1	因子2	因子3	共通性
<因子1：関係性・体験の広がり>				
ナ みんなで協力して活動する経験を得た	.747	-.066	-.065	.466
ニ 意見や性格の異なる人と、協力したり折り合ったりして活動する経験を得た。	.644	.066	-.003	.467
タ 悩みを話せたり、助け合えたりする友人が得られた	.623	.050	-.047	.400
サ それまでよりも交友関係が広がった	.558	-.012	.156	.409
シ 新たな場所に出掛けたり、新たな体験をしたりする機会を得た	.417	.018	.147	.265
ノ それまでより、異性とスムーズに接することができるようになった	.344	.145	.045	.220
<因子2：生き方・自信・行動スキル・主体性>				
ス 将来の夢・生き方が見えた。	-.074	.607	-.059	.301
テ 人前で自分の意見を言ったり、話したりすることができるようになった。	.117	.495	-.020	.317
ヌ マナーや礼儀、ふるまい方が身についた	.168	.426	-.084	.260
ツ 関心のあることを試し挑戦する経験を得た	.181	.419	-.018	.289
キ 職業に役立つ知識、技術が身についた (カ以外)	-.122	.394	.149	.165
セ 自分に自信がついた	-.038	.392	.160	.207
ソ 人を信頼できるようになった	.285	.385	-.053	.331
ケ 自分とは何か、人生は何かなどについて考える機会を得た	.097	.378	.027	.206
ト リーダーとして活動する経験を得た。	.067	.373	.031	.185
ク 実生活に役立つ知識、技術が身についた	.039	.356	.112	.192
ネ 信頼できる教師に出会えた	.258	.318	-.133	.216
チ 自分自身で計画して行動できるようになった	.238	.246	.077	.224
コ 社会や自分の周りの状況を理解する力を得た	.224	.244	.094	.220
<因子3：教科の知識・技能>				
ア 大学受験、進学に役立つ知識、学力を得た	.185	-.248	.625	.420
カ 英語や文書作成、表計算など必要な技術が身につけられた	-.066	.118	.525	.300
イ 教科学習の内容を理解できた	.162	-.102	.499	.303
オ 文章の書き方を学んだ	-.050	.192	.437	.264
エ 調査・実験などの方法を学んだ	-.075	.214	.346	.185
ウ 学問への関心を持つようになった	-.167	.295	.309	.174
因子寄与	4.267	4.092	2.795	

「高校時代を通して学んだこと・得たこと」の25項目に対して最尤法による因子分析を行った。固有値の減衰状況から、3因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度3因子を仮定してプロマックス回転による因子分析を行った。プロマックス回転後の最終的な因子パターンと因子間相関をTable 1に示す。 α 係数は因子1 = .771, 因子2 = .785, 因子3 = .651となった。

因子1は6項目で構成されており、「みんなで協力して活動する経験を得た」「意見や性格の異なる人と、協力したり折り合ったりして活動する経験を得た」「新たな場所に出掛けたり、新たな体験をしたりする機会を得た」など、他者との協力、活動経験、経験の広がりなどの内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「関係性・体験の広がり」因子と命名した。

因子2は13項目で構成されており、「将来の夢・生き方が見えた」「人前で自分の意見を言ったり、話したりすることができるようになった」「自分に自信がついた」「人を信頼できるようになった」など、自身の生き方を見出したり、主体性、他者への信頼に関する項目が高い負荷量を示していた。そこで「生き方・自信・行動スキル・主体性」因子と命名した。

因子3は6項目で構成されており、「大学受験、進学に役立つ知識、学力を得た」「英語や文書作成、表計算など必要な技術が身に着けられた」「教科学習の内容を理解できた」、進学に役立つ学力や学習の方法に関する内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「教科の知識・技能」因子と命名した。

7 「高校時代を通して学んだこと・得たこと」の3つの因子と他項目との関連の分析

「高校時代を通して学んだこと・得たこと」項目の因子分析から得られた3つの因子と高校での学習経験にはどのような関連が見られるだろうか。「関係性・体験の広がり」因子、「生き方・自信・行動スキル・主体性」因子、「教科の知識・技能」因子のそれぞれの各項目の得点を合計した得点と「『総合的な学習の時間』の印象」、「探究的な活動、研究、プロジェクトなどを実施した経験」の各項目、「生徒が中心となって活動・運営したり、規則・予算を決めたり、企画を実施したりした経験」の各項目との関係を検討する。

「『総合的な学習の時間』の印象」と「高校時代を通して学んだこと・得たこと」の因子分析で得られた3つの因子の各因子に属する項目の点数の相関係数を表15に示す。「総合的な学習の時間」の印象と、「関係性・体験の広がり」因子の合計得点の相関係数は-0.167で1%水準で有意となった。「生き方・自信・行動スキル・能動性」因子の合計得点との相関係数は-0.131で5%水準で有意であった。「教科の知識・技能」因子の合計得点との相関係数は-0.08で有意ではなかった。

表15 「『総合的な学習の時間』の印象」と、各因子の合計得点の相関係数

	関係性・体験の 広がり	生き方・自信・行動 スキル・主体性	教科の知識・技能
「『総合的な学習の時間』の印象 ²	-0.167**	-0.131*	-0.08

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

²「ア とても印象に残っている」を1点、「イ まあまあ印象に残っている」を2点、「ウ あまり印象に残っていない」を3点、「エ まったく印象に残っていない」を4点としているため、逆転項目となっている。

次に「高校時代を通して学んだこと・得たこと」の因子分析で得られた3つの因子の各因子に属

する項目の合計得点と、授業外での探究的な活動、自主活動の関連を対応のないt検定を用いて検討した。

「関係性・体験の広がり」は、文化祭・体育祭（自主活動） $t(339) = -3.48, p < .01$ 、地域活動（自主活動） $t(328) = -3.35, p < .01$ が1%水準で有意であり、部活動（自主活動） $t(337) = -1.98, p < .05$ 、委員会活動（自主活動） $t(335) = -2.264, p < .05$ 、宿泊研修・修学旅行（自主活動） $t(335) = -2.459, p < .05$ が5%水準で有意となった。生徒会活動（探究） $t(344) = -1.833, p < .10$ 、部活動（探究） $t(346) = 1.732, p < .10$ は10%水準で有意であった。

「生き方・自信・行動スキル・主体性」は、文化祭・体育祭（自主活動） $t(339) = -3.013, p < .01$ 、委員会活動（自主活動） $t(335) = -2.994, p < .01$ 、宿泊研修・修学旅行（自主活動） $t(335) = -2.843, p < .01$ 、生徒会活動（自主活動） $t(338) = -2.652, p < .01$ が1%水準で有意となった。部活動（自主活動） $t(337) = -2.309, p < .05$ 、地域活動（自主活動） $t(328) = -2.336, p < .05$ は、5%水準で有意となった。

「教科の知識・技能」は部活動（探究） $t(346) = 2.489, p < .05$ が5%水準で、委員会活動（探究） $t(343) = 1.704, p < .05$ 、文化祭・体育祭（探究） $t(348) = 1.797, p < .10$ 、宿泊研修・修学旅行（自主活動） $t(335) = -1.819, p < .10$ が10%水準で有意となった。

表 16 各因子の合計得点と授業外での探究学習、自主活動の各項目とのt検定結果

	関係性・体験の 広がり			生き方・自信・行動 スキル・主体性			教科の知識・技能						
	ある (M)	なし (M)	t値	ある (M)	なし (M)	t値	ある (M)	なし (M)	t値				
授業以外の活動や SSHの活動などで、 探究的な活動、研究、 プロジェクトなどを 実施した経験	生徒会活動	3.14	2.36	-1.83	+	5.00	3.64	-2.06	*	1.81	2.25	1.22	
	部活動	2.16	2.52	1.81	+	3.74	3.67	-0.21		1.93	2.38	2.49	*
	委員会活動	2.45	2.42	-0.11		3.89	3.69	-0.48		1.91	2.32	1.70	+
	修学旅行・宿泊研修	2.50	2.39	-0.55		3.20	2.77	-1.93		2.23	2.26	0.20	
	文化祭・体育祭	2.00	1.84	1.14		3.80	3.68	-0.35		2.01	2.34	1.80	+
	地域活動	2.89	2.35	-1.61		4.11	3.66	-0.86		2.14	2.25	0.36	
その他	2.11	2.42	0.71		3.11	3.63	0.78		2.32	2.22	-0.25		
授業以外の活動で、 生徒が中心となって 活動・運営したり、 規則・予算を決めたり、 企画を実施したり した経験	生徒会活動	2.74	2.44	-1.21		4.70	3.66	-2.65	**	2.32	2.29	-0.11	
	部活動	2.74	2.33	-1.98	*	4.30	3.54	-2.31	*	2.41	2.19	-1.24	
	委員会活動	2.98	2.38	-2.26	*	4.85	3.61	-2.99	**	2.41	2.19	0.12	
	修学旅行・宿泊研修	2.85	2.32	-2.46	*	4.49	3.51	-2.84	**	2.51	2.16	-1.82	+
	文化祭・体育祭	2.81	2.10	-3.48	**	4.27	3.31	-3.01	**	2.34	2.20	-0.78	
	地域活動	3.89	2.40	-3.35	**	5.33	3.69	-2.34	*	2.11	2.26	0.39	
その他 ³	-	-	-		-	-	-		-	-	-		

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

³自主活動の「その他」は「ある」が3名しかいなかったため今回の分析から外した。

「関係性・体験の広がり」因子、「生き方・自信・行動スキル・主体性」因子の双方とも、高校における授業外での自主活動との関連が見られた。文化祭・体育祭での自主活動は双方の因子とも関連が高かった。地域活動での自主活動は「関係性・体験の広がり」因子との関連が高く、学校外の

地域の人との交流があったためであろう。生徒会、委員会活動、修学旅行・宿泊研修での自主活動は「生き方・自信・行動スキル・主体性」因子との関連が高く、それらの活動において生徒が企画・運営の主体となる機会が設けられているためと考えられる。

生徒会活動での探究活動は「関係性・体験の広がり」, 「生き方・自信・行動スキル・主体性」と弱い関連があった。部活動での探究活動は「関係性・体験の広がり」, 「教科の知識・技能」と弱い関連があるが、ないと回答した生徒の方が、因子得点が高くなっている。

『総合的な学習の時間』に対する印象は、「関係性・体験の広がり」と中程度の相関、「生き方・自信・行動スキル・主体性」と弱い相関がみられ、生徒の関係性・体験の広がりや主体性の獲得と関係がみられた。

8 考察

以上、高校での学習に関する、大学生への回顧的質問紙調査の結果を分析した。結果をもとに、1) 高校における「総合的な学習の時間」の状況、2) 高校での教科学習の授業の状況、3) 生徒が高校で学ぶことと高校の役割、の3点を考察する。

1) 高校における「総合的な学習の時間」の状況

高校における「総合的な学習の時間」に関する5項目の質問項目の検討からは、以下の5点が明らかになった。①高校の「総合的な学習の時間」が時間割にあったという回答は7割程度であり、4分の1は「総合的な学習の時間」が時間割になかった。②「総合的な学習の時間」の印象も、「あまり印象に残っていない」「全く印象に残っていない」が全体の7割強と希薄である。③学習内容は、修学旅行の事前事後指導、進路学習などが中心である。④学習方法は、「書籍・資料を読む」「インターネットの検索」など資料の検索や読解が多い。「ディスカッション」「ディベート」などの生徒同士の対話、「インタビュー」「フィールドワーク」などの学校外での活動も行われているが、実施率は1割から2割に留まる。⑤学習を通して学んだこととしては、「学習を通じて、自分の将来の進路がはっきりとした」が最も多い。「一つの題材について深く知り、考えていく機会となった」「学習を通して新たな人、場所、本に出会う体験ができた」「作業を通じ、新たな知識や技術を得ることができた」など新たな題材、人、場所、本と出会い、技術を学び深く考える機会となった生徒も存在している。

高校の「総合的な学習の時間」の実施の状況は低調であり、学習内容・方法も、修学旅行の事前事後指導や進路学習や、書籍を読む、インターネット検索など、生徒が「自ら課題を設定し、追究する」活動からは遠かった。この低調さは、先行研究である中村（2015）の指摘の通りである。富田（2014）は、「総合的な学習の時間」の低調さの背景には大学受験圧力が存在していることを指摘している。特に高校階層上位校においては教科学習の既存の授業時間配分を維持しようとする力が強い「総合的な学習の時間」は7時間目などに置かれ、その状況を変えることは難しいと記している。

しかし、「総合的な学習の時間」実施が7割程度で、学習内容も探究学習としては実施されていないという状況は、2019年度から「総合的な探究の時間」が試行実施される状況とあまりにも乖離している。ただ、学習が、新たな題材、人、場所、本と出会い、技術を学び深く考える機会となっ

た生徒も存在しており、実施された場合の生徒への意義も読み取れる結果となっている。今後、新学習指導要領の基で、どのようにカリキュラムを組み、体制を構築するかにより、実施状況、内容も変化する可能性がある。

2) 高校での教科学習の授業の状況

高校における教科学習に関する質問項目からは、①高校における教科学習の授業形式は一斉授業が中心である。グループやペアでの協同学習は中程度以下であり、「テーマを決め研究や調べ学習を行う」や「レポートや小論文を書く」などの活動も少ない、②一方で、生徒は教師中心の一斉授業に不満を抱えており、参加型の授業や生徒が主体となる授業を望んでいる、という2点が明らかになった。

この結果は、高校の教科学習は、受動的で知識中心という先行研究の指摘（国立青少年教育機構、2018）と一致している。また、生徒が参加型の授業や生徒が主体となる授業を望んでいるという今回の結果は、次期学習指導要領において「主体的・対話的で深い学び」が導入される方向性と合致している。

しかし、高校の授業が知識中心である背景には、学習指導要領や教科書で扱われている用語や情報が膨大であり、大学受験においてもその知識が求められるという構造的な問題もある。一方で、次期学習指導要領においては「歴史総合」「日本史探究」「世界史探究」「古典探究」などの教科において「課題を追究したり解決したりする活動を通して」学ぶことが求められている（文部科学省、2018）。本調査の結果では教科学習においては、課題を設定し探究する学習は少なく、さまざまな矛盾が残る状況となっている。「主体的・対話的で深い学び」が提起されたことにより、高校の授業は変化しつつあるが、授業形式の本格的な変化は大学入試改革の進展や、次期学習指導要領実施後になるとと思われる。

3) 高校での生徒の学びと教育機関としての高校の役割

高校での授業外での探究活動、自主活動、高校で学んだことに関する項目の分析結果からは、以下の4点が明らかになった。

- ① 部活動、修学旅行、文化祭などの行事において生徒の自主活動・探究活動が行われているが、探究活動の経験率は3割、自主活動は5割程度であること。
- ② 「高校で学んだこと」としては、大学進学への知識、学力の獲得、仲間関係の形成、集団での協力経験が上位で半数程度の回答率であった。一方「職業に役立つ知識、技術が身についた」など「実生活に役立つ知識、技術が身についた」であり、職業・実生活につながるプラクティカルな知識・技術が下位で、1割程度の回答率であった。
- ③ 「高校で学んだこと」の項目への因子分析の結果、「関係性・体験の広がり」、「生き方・自信・行動スキル・能動性」、「教科の知識・技能」の3因子が得られた
- ④ 「関係性・体験の広がり」因子は「総合的な学習の時間」への肯定的な印象、文化祭・体育祭、地域活動での自主活動との関連が見られた。「生き方・自信・行動スキル・能動性」因子は、「総合的な学習の時間」への肯定的な印象、文化祭・体育祭、委員会活動、宿泊研修・修学旅行、生徒会活動における自主活動との関連が見られた。

「高校で生徒が学んだこと、得たこと」の内容として、大学受験のための学力や、教科の知識の獲得だけでなく、仲間関係の形成や、集団での協力経験が挙げられた。高校教育は大学受験への通過

点であり、そのため、高校の学習は、「詰め込み式・受動的な学習」に偏っていると捉えられてきた（子安，2008）。しかし、それだけではなく、高校教育も生徒の人間形成に一定の役割を果たしていると考えられる。

また、「高校で学んだこと」の項目の因子分析の結果得られた「関係性・体験の広がり」「生き方・自信・行動スキル・能動性」「教科の知識・技能」の3つの因子の内容は、OECD（経済協力開発機構）の提起する“キー・コンピテンシー”の3つの能力と重なる部分がある。

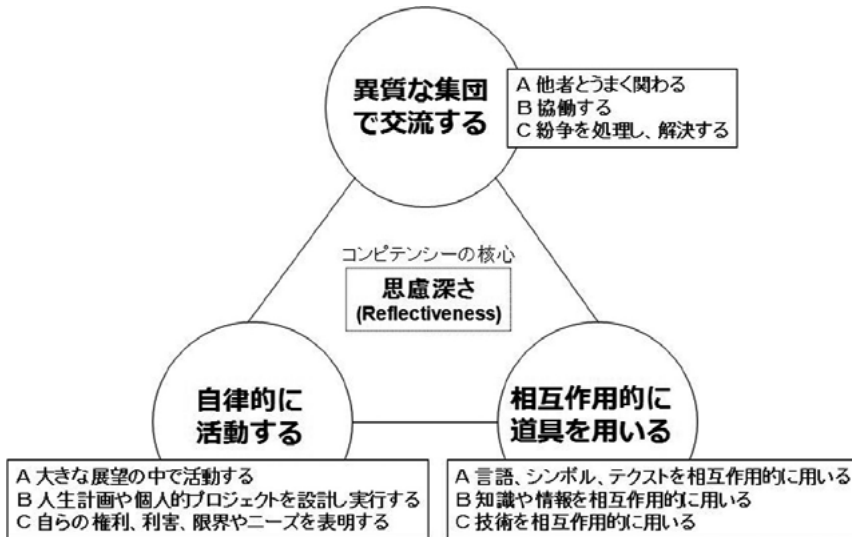


図1 キー・コンピテンシーの内容（文部科学省，2006）

図1はOECDの提唱するキー・コンピテンシーの3要素の内容である。「相互作用的に道具を用いる（能力）」は、言語、シンボル、テキストを相互作用的に用いる能力や、知識や情報を相互作用的に用いる能力などを示しており、「教科の知識・技能」因子の項目内容に近いものとなっている。

「異質な集団で交流する（能力）」は、他者とうまく関わる、協働する、紛争を処理、解決する能力が含まれる。この内容は、「みんなで協力して活動する経験を得た」「意見や性格の異なる人と、協力したり折り合ったりして活動する経験を得た」「悩みを話せたり、助け合えたりする友人が得られた」などの「関係性・体験の広がり」因子の項目内容に近い。

「自律的に活動する（能力）」は、個人の自律性と主体性に関する能力であり、大きな展望の中で活動する、人生計画や個人的プロジェクトを設計し、実行する能力が含まれ、「将来の夢・生き方が見えた」「人前で自分の意見を言ったり、話したりすることができるようになった」などの「生き方・自信・行動スキル・能動性」因子の項目内容に近いものとなっている。

以上の3点は必ずしもすべて一致するわけではないが、現在の高校においても、キー・コンピテンシーの提唱する3つの能力を育成する機能を担い、生徒を育てている側面があるのではないだろうか。

とりわけ「異質な集団で交流する（能力）」と対応する「関係性・体験の広がり」に対する寄与は大きい。また、t検定の結果から「関係性・体験の広がり」、「生き方・自信・行動スキル・主体性」に対する高校での自主活動の寄与も今回の分析で示された。現在、授業数の増加により、文化祭や

体育祭などの行事が高校においては削減され、生徒の自主活動の機会が少なくなっている。今後導入される探究学習がその代替の機会となる可能性もあるが、そのためには、形式的な実施ではなく、生徒が自らの関心を問い、追究を通して学び、体験を深めるような探究学習として実施していく必要があると思われる。

4) 本研究の限界と今後の展望

本研究の限界としては、今回の調査は、大学に進学した中堅進学校の生徒が対象者であり、高校生全体を代表しているわけではないことがある。また生徒の記憶による回顧調査のため正確な実施状況を反映していない可能性がある。

高校での探究学習をめぐる状況は大きく変化しつつある。大学入試改革により、高校での探究学習の成果が国立大学の推薦入試で問われるようになり、スーパーサイエンスハイスクール (SSH) 指定校やスーパーグローバルハイスクール (SGH) 指定校においては、多くの課題研究が行われている。今後の学習指導要領の本格的な実施を受け、高校の学習や高校の役割も変化していくと思われるため、可能であれば大学生を対象とした調査を継続的にを行い、高校の学習や教育機関としての在り方の変化について継続的に追跡していきたい。

付 記

本研究は、科学研究費基盤 C (15K04517) 「21 世紀型能力育成と高校改革をめざす高校総合学習の総合的研究」(和井田清司代表) の助成を受けて実施した。また、質問紙調査の実施に関して、和井田清司氏、宮下与兵衛氏のご協力を頂き、感謝申し上げたい。

参考文献

- 国立青少年教育振興機構 (2018) 「高校生の勉強と生活に関する意識調査報告書—日本・米国・中国・韓国の比較—」, 国立青少年教育振興機構.
- 子安潤 (2008) 「学びの貧困化に立ち向かう」『高校生活指導』, 178, pp. 66-73.
- 富田知世 (2014) 「公立進学高校の授業時間配分と正当性—東北地方 X 高校の総合的な学習の時間導入をめぐる教師の認識に着目して—」『子ども社会学研究』20 号, pp.17-30.
- 中村裕行 (2015) 「『総合的な学習の時間』の理想と現実」『日本私学教育研究所紀要』, 第 51 号, 日本私学教育研究所, pp.61-64.
- 文部科学省 (2006) 「OECD における『キー・コンピテンシー』について」(最終閲覧日, 2019 年 2 月 26 日) (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1399302.htm)
- 文部科学省 (2014) 「平成 25 年度公立高等学校における教育課程の編成・実施状況調査の結果について」2014 年 5 月 26 日公表.
- 文部科学省 (2018) 「高校学習指導要領」, 2018 年 3 月 31 日告示.